
企画コンセプト

FPCJ45 周年ウェビナー(国際シンポジウム)

メディアの将来:ソーシャルメディアと報道機関の競合と共存
～コロナ禍であぶり出された課題とは?～

【問題意識】

市民の情報源として、報道機関に加えて、Facebook や Twitter などのソーシャルメディアが大きな役割を果たし、発信ツールとしても幅広く利用されるようになって久しい。

ソーシャルメディアの普及により、政府、企業・団体、個人がそれぞれの見解や伝えたい情報を、報道機関を経由せずに、リアルタイムで発信、周知できるようになった。また、ソーシャルメディアは言論・報道の自由が制約されている権威主義国家における草の根の民主化運動や、人種差別反対やジェンダー平等の実現、気候変動問題などに取り組む市民の社会運動に欠かせない存在になっている。

報道機関にとってもソーシャルメディアはもはや不可欠な存在だ。報道機関は、ソーシャルメディアで発信された情報をニュースとして二次的に報じ、ソーシャルメディア上の議論のトレンドを「世論」として取り上げる。市民が撮影した災害・事故・事件現場の映像を入手してそのまま報道することもある。一方で、報道機関が発信するニュースは、当該ニュースの当事者や専門家を含むソーシャルメディアのユーザーに常にウォッチされ、誤りがあれば、訂正や自浄を迫られることもある。

そして、COVID-19 がもたらしたパンデミックは、報道機関に多くの課題をつきつけている。変異を繰り返すこの未知のウィルスの実態や、新たに開発されたワクチンの有効性や安全性について、何が真実で何が誤情報であるかを、報道機関が常に「正確に」伝えるのは至難の業だ。このような非常時においては、政府や公的機関が発表する情報やメッセージを速やかに伝達することを第一にするのは当然である。それだけに、パンデミックという事態に直面して、「権力の監視機能」としての役割、即ち、政府の発信情報の説明責任を追及することは容易ではなく、政府への迎合も起きやすい。それが人々のメディア不信を引き起こす要因にもなり、ソーシャルメディア上には報道機関に対する批判も見られる。いま、改めて報道機関が発信する情報の信頼性が問われていると言える。

一方で、ファクトチェックや自主規制が働かないソーシャルメディアには、様々な立場の専門家の見解や、市井の人々の直截的な声が溢れている。また、チェック機能がないがゆえに、匿名での無責任な極論や誹謗中傷、デマ、フェイクニュースの温床でもある。なかでもワクチンについては、接種直後に身内が亡くなったという体験談のみならず、ワクチンの副反応で不妊になる、遺伝子が書き換えられるといった根拠を欠く主張まで様々な言説が流布されている。こうした、ソーシャルメディア上の言説がワクチン忌避の一因であるとの指摘がされており、その影響は看過できない。

【主旨】

ソーシャルメディア上で、政府、企業・団体、専門家、個人が自ら発信でき、それが可視化されるなかで、既存の報道機関(＝プロフェッショナルなジャーナリスト集団)の果たすべき役割とは何か。コロナ禍であぶり出された課題を通じてソーシャルメディアとの役割の違いをいま一度問い直すことで、報道機関ならではの強みや今後進むべき方向性が見えてくるのではないか。

本シンポジウムでは、上記の問題意識を背景に、ジャーナリズムとソーシャルメディアの各専門家による講演を踏まえ、欧州、米国、アジアのジャーナリストが彼らを交えて議論することで、メディアの将来を展望する。

論点整理

<第1セッション論点>

(冒頭のジャーナリズム研究者による講演を踏まえ、全員で議論する)

ソーシャルメディアが興隆するなかで、既存の報道機関がつけつけられる課題や挑戦とは何か。また、それを受けてどのような自浄作用がありうるか。特に、新型コロナ感染対策に関する報道に対し、ソーシャルメディアの側から提起されている批判(新たに開発されたワクチンの有効性や安全性について、報道機関は何が真実で何が誤情報であるかを検証しきれておらず、政府情報を無批判に報じているだけではないかなど)をどう捉え、人々のメディア不信にどう対処すべきか。いま、改めて報道機関が発信する情報の信頼性が問われている。

<第2セッション論点>

(冒頭のソーシャルメディア研究者による講演を踏まえ、全員で議論する)

ソーシャルメディアの問題点——匿名性による無責任な極論や誹謗中傷、不確かな情報、デマ、フェイクニュースが拡散され、それらの温床となっている実態とは。特に、コロナ禍においてはワクチン副反応に関するソーシャルメディア上の根拠なき言説がワクチン忌避に及ぼす影響が指摘されている。このような現状に、報道機関ができることはあるか。

<総括セッション論点>

ソーシャルメディア上で、政府、企業・団体、専門家、個人が自ら発信でき、それが可視化されるなかで、既存の報道機関(プロフェッショナルなジャーナリスト集団)が果たすべき役割や、求められる能力とは何か？ コロナ禍であぶり出された課題を通じてソーシャルメディアとの役割の違いを確認することで、報道機関ならではの強みや今後進むべき方向性が見えてくるのではないか。

(パンデミックという差し迫った状況の中で不安や孤独が煽られ、極端な言説を鵜呑みにしてしまい、科学的根拠に基づく情報を受け入れない人々の心理を理解した上で、報道機関は情報の伝え方をどう工夫するべきかについても考える。)

(以上)